

秋葉原無差別殺人事件—殺しの自由

「真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。」 小野しまと

☆ ☆ ☆

「人はなぜ人を殺すのか。自由だからである。この問題を正面きって扱った哲学書はかつて無かった。それを誰にでも判る平易な文章で、最近の異常な事件をも視野に入れて解説した必読の書」

これは、2001年3月にビワコ・エディションから出版された西村浩太郎著『カインの印—殺しの哲学—』の帯に付けられた最初の文章である。

この文章に対して、朝日新聞の広告代理店から早速文句が付けられた。「人はなぜ人を殺すのか。自由だからである」という言葉があまりにも過激なので、新聞広告には載せられないという理由だった。

「自由だからである」というのは、まるで殺人を奨励しているように聞こえる。いくら殺してもいいんだよといった感じだ。この一句を除かないかぎり、新聞に載せることはできないというのである。代理店を通して新聞社の責任部局に再度かけ合ってもらったが、答はやはりノーだった。

この本の販売取次店からもクレームが付いた。見本として十数冊贈呈したのだが、帯を書き直して付け替えるようにという半ば命令に近い要求が返ってきた。

これは新聞広告の掲載拒否よりももっと怖いことなのである。取次店に反抗すれば、本を売ってもらえなくなる。弱小出版社にとっては死活に関わる問題だ。そこで、ビワコ・エディションでは、帯を次のように書き直した。

「カインはなぜ弟を殺したのか（旧約聖書『創世記』第4章）。この問題を考えることによって、現代が見える、歴史が見える、人間が見える。はたしてカインの末裔に救いはあるのか」

これを最初の帯の文章と比べてもらえば、本の印象に決定的な違いのあることが分かるであろう。著者の主張がどこか遠くへ霞んでしまっている。前の文章だったら、もう少しこの本を手にとってくれる人が増えたかも知れない。

この本の著者が、旧約聖書に描かれたカインの弟殺しを取り上げたのは、人間の殺しの衝動を説明する上で、聖書の人間解釈がきわめて重要な視点を与えてくれるからである。しかし、これがこの本の主題ではなかった。聖書はあくまで傍証である。

この本の主題は、
（第一章）人はなぜ人を殺すのか、
（第二章）人は何のために殺すのか、
（第三章）人はどのように殺すのか、
（第四章）なぜ殺してはならないのか、
という四つの問いを通して、人間が抱える「殺し」の問題に明確な答を出すことにあった。

そのため、当時社会を騒がせていたいくつかの殺人事件、例えば神戸連続殺人事件（酒鬼薔薇聖斗事件）やパリ人肉嗜食事件、地下鉄サリン事件、等々を細かく分析して、殺しの意味を解明しようとしたのである。

殺しの問題を解くキーワードもしくは根本概念が「自由」ということなのである。

人は一般に「自由」という言葉を良い方向でのみ考えようとする傾向がある。だから「人はなぜ人を殺すのか。自由だからである」などという言葉を知ると、殺人を美化しているように感じてしまうのである。

しかし、自由というのは、善の方向にも悪の方向にも開かれた二面的なものであることを忘れてはならないであろう。善ばかりではなく悪を選ぶ可能性が無ければ、自由などというものは存在しない。

何が善で何が悪かはっきり分かっていないのに、どちらかを選ばねばならないというのが人間の置かれた運命である。

ユダヤ・キリスト教は、この人間の運命を「原罪」と呼んだ。人間が自由であるということが、まさに「原罪」なのである。この論理構造を明らかにしてきたのは、キリスト教神学などの宗教の立場ではなくて、むしろ哲学であった。

と言っても、西洋哲学の理解には曖昧なところがあって、「自由」を肯定的な良い意味で捉える傾向が強く、この言葉を国家理念の一つにする国も多いのである。

しかし、自由そのものが正しい目標だというわけではなくて、例えばフランス共和国に見られるように、何かを自由に選ぶ権利は人類にとって「平等」であり、それは人類全体への愛、つまり「博愛」に向けられねばならないという理想を伴った「自由」なのである。

それは、原罪としての自由をすべての人間が平等に受けて立つという発想であって、一部の人間に善悪の決定やその責任を委ねるわけにはいかないという考え方なのである。

「人間は自由であるという罰を受けている」とサルトルは言ったが、これは、以上のような原罪の理解に一步近づいたものと言える。そして、アダムとイブの創造神話の意味を明らかにし、世界でも初めて、原罪と自由の論理構造を示した本が、まさに西村浩太郎著『カインの印—殺しの哲学—』なのである。

この本によれば、人間には「造る」自由と「壊す」自由があるが、「造る」自由は限られている。人間は、神のように世界を無から造り出すことはできない。どんなに科学技術が進歩発展しても、まったくの無から新しい生命を生み出すことはできないのである。

しかし、破壊し滅ぼすことになる、ほとんど神に近いような能力を発揮する。とりわけ、人間に与えられた最大の自由と言えるのは、「殺す自由」なのだ。

人間は、永遠の生命を創り出すことはできないが、生命に永遠の無を与えることができる。神のように造ることはできないが、神のように滅ぼすことはできるのである。

このように考えると、人間の殺す自由がいかに大きなものかということが判るであろう。他者を殺すことばかりでなく、自分を殺すということ、つまり自殺をも視野に入れるならば、この自由は神の自由をさえ越えている。

なぜなら、永遠ということを経験する神にとって、自らを無にすることは不可能だからである。神には自分を殺すことができない。

ところで、最近多発している無差別殺人事件を見ると、若者たちが手にしようとしているのが、このような人間にとっての最大の自由、すなわち「殺しの自由」であることが、ますますはっきり見えてくるのである。

彼らが一様に口にするのは、「殺す相手は誰でもよかった」という言葉である。相手が誰でもよいということは、特定の誰かが恨みや復讐の対象になっているわけではなくて、自分の殺す行為だけが目的であることがよく判るのである。

誰でもよいという発想の中には、自分自身も含まれているのが彼らの特徴だと言える。自殺も他殺も同じだということは、特定の相手に危害を加えようということよりも、やはり殺しという自由な行為に目的があることをよく示している。

しかし、自分を殺すことと他者を殺すことのどちらにより大きな自由を感じることができるであろう。

まず、自殺だけでは、負け組の行為と見られかねない。社会の圧力に耐えかねて、この世から逃げ出そうとする敗残者のイメージを拭いきれないのである。

死に対する本能的な怖れもある。自ら自分に痛みや苦しみを与えるためにはよほどの勇気と思いきりが必要であろう。土浦の殺傷事件の犯人は、自分が沢山の人を殺せば、いずれ死刑にしてもらえるだろう、というようなことを言っていた。

自殺をしたくても、自分では怖くてできないので、人にやってもらおう。その間接的な自殺の手段として他殺を行うという、まったく身勝手な論理なのだが、それだけに他者の死の重みもそれほどには感じていないと言うことができる。

他者が特に憎かったり、恨みがあったり、痛みや苦しみを与えてやろうということではないのだ。自分が他者にやってもらおうように、まるで自殺幫助でもするような気持ちで、他者にもこの世から消えてもらおうということなのだ。

最近起こった一連の無差別殺人事件で、犯人の罪悪感や後悔の念がほとんど感じられない理由は、そんなところにもある。むしろ、複数の人間の生命を支配することができたという満足感さえ感じられる。

複数の人間を殺すということは、複数の世界を消滅させることに他ならない。各人はそれぞれ自分の世界を持っているが、それが一瞬のうちに消され、あとには何も残らない。世界は完全に消滅する。

自分の死後も一つの世界が残るだろうと考えるのは、あくまで仮定であって、現実には自分の死とともに全世界が無に没するというのが、死の本来の意味である。

そういう死の運命を複数の世界に与えられるというのは、何という力であろう。いま突然神にでもなったような、あるいは絶対君主にでもなったような自由を味わうことになる。

自分を殺す自由の前には、越えねばならない様々な障害や困難があって、そこにまで至ったという自由の実感は、他者を殺す行為よりも大きいと言えるが、他殺の場合には、その犯行を人々に見せるという自己顕示が得られる。

秋葉原のような舞台を選び、そこでできるだけ沢山の人間を殺そうと企てる。他者にとっては自分が神にも等しい支配者であることを示し、これまでの人生には無かった自由の気分を手に入れようとするのだ。

多くの若者がなぜこのような行為を選び、「壊す」自由へと飛び込んでいくのか。その答をひとことと言うと、「造る」自由が奪われているからである。

あらゆる領域で、あらゆる方向で、自由の可能性が失われ、自由な能力の発展が抑えられている。自由の喪失がいまや一般化している社会であり、時代だと言える。

その中で巧みに行動できる者だけが成功しているが、その成功の背後にも自由の喪失の影が見えないわけではない。

いまや社会にとって緊急に必要なことは、真の自由の回復であり、「壊す」自由から「造る」自由へと人々を導いていく方法論である。

これは日本の社会のみならず世界にとっても必要なことであろう。今もなお集団虐殺の行われている国は多い。そこでは、手に銃を持った男たちが、自分たちに残された自由はこれしか無いとばかりに、殺しをむしろ生き甲斐にし楽しんで見えるのはなぜだろう。

イラクの内乱でも、歓声を挙げながら反対派の兵士たちを拷問し殺害している男たちの姿がテレビに写されていた。自分たちも日頃抑圧され、出口の無かった自由への意志が、いま暴力という最悪の形で解き放たれているのだ。

そのような殺人衝動に捕らわれた一人の男が、「世界の黄昏」を演じることに最大の自由を見だし、核兵器のスイッチを一押しすれば、世界の歴史も終末を迎えることになる。

今こそ、日本にとっても世界にとっても、自由の意味を考える哲学、すなわち「自由の哲学」が必要な時なのである。何が真の自由であり、人類にとってはどんな自由が必要なのかということ、この哲学を基礎にして、社会的・政治的・経済的に考え直していくことが、今や緊急の課題なのである。

秋葉原無差別殺人事件を始めとする一連の凶悪犯罪に対する方策も、こういう「自由」の本質の究明を目的とする、広い意味での実践哲学を根本としないかぎり、解決は不可能であろう。

〈追記〉

秋葉原の殺人事件を模倣するネットへの書き込みが相次いでいたが、ついに大阪駅でも無差別に

女性ばかり 3人が切られるという事件が起こった（6月23日）。犯人は女性と見られているが、他の女性たちを傷つけたいという願望は、いずれは他者の生命をも消し去りたいという「自由」への衝動へと転化していく恐れがある。

[2008/06/25 magmag]